

緑のまきば

1982 1618

小金井緑町教会
小金井市緑町四一十六一三三
電話〇四三三一八一七九六一
編集 牧師 山本圭一

教 説

私に従ってきなさい

説

I

山本圭一

恐らく、大変な群衆が押し寄せてきたのだろうか。いつの時代も人は、自分の病患をいやされる確かな手だてを求めて、さすらう。主イエスがガラヤの海へに出行かれた時、多くの人々がみもとに集つてきたのも不思議ではない。しかし、一つの出来事に注意する必要がある。それはイエスに従うことによつて、彼らがめいめいの家を出たことである。自分の仕事を差しおいて生活の場を離れたのである。これがイエスの教えを聞く備えであつた。

「断念とは、きわめて明確な行為であるとともに、行為そのものの放棄でもあるわけです。：そして人が断念において獲得するものもまた明確であります。それは：むしろ絶望に近い。この絶望にほとんど膚接している信仰の位相を私たちは見落してはならないと思います。」（石原吉郎・「断念の海から」。）

II

ここで木彫りのような簡潔さで信仰の位相が現れ始める。主はアルバヨの子レビが取税所に坐つてゐるのをごらんになつた。一見、平凡な風景である。しかし、無言の洞察はレビの葛藤を見すえた。「所詮この俺にあのイエスは何の関係もありやしない。話を聞いて何のタシになる。」その時である。「わたしに従つてきなさい。」何と唐突で、衝撃にみちたことは

であろうか。レビはユダヤ人社会の圏外にあつた。取税人はローマ人やヘロデ家の手先であつたからである。にもかかわらず教会の壁の外にある者にも、主は全人格を吐露して呼びかけられた。自らの人格性に目覚めさせるものは、ひとり人格をもつてする以外に道はない。人格との邂逅だけが、人を人格的存在たらしめる。彼の内的な意志を鼓舞することによつて、「立ち上る」ことを可能にした。と同時に、「従う」決断と行為とが豁然とした視野を伴つて拓かれてきたのである。

III

世界教会協議会の創始者、ノーベル平和賞受賞者のジョン・R・モット博士（一八六五—一九五五）は、若き日の回心と献身の経緯を次のように記している。

「私は、一八八六年伝道者ムードイがケンブリッジの運動選手タッドをコーネル大学の学生への証しのために呼んだ集会で、生物教室のうしろの席に坐つていた。その時、講演者は三つの短いセンテンスを語つた。これこそ、私の生涯の転機となつたものである。『あなたは、自分のために偉大なことを求めているのではないですか？それは止めなさい。先ず神の国を求めなさい。』：私は自分の

IV

部屋に帰り勉強に手がつかず、ただ自分の心と闘つた。：机の上に書類をひろげたまゝ、色あせたカーペットにひざまづいて折つた日を決して忘れることができない。」

さて、レビの召命は、主と共に食事をする場所へとつながつてゐる。罪人や取税人たちは、主と食事を共にすることに、喜びに溢れた。それは、復活の主がエマオ途上の二人の弟子と一緒に食卓につかれた時、「彼らの目が開けてそれがイエスであることがわかつた」とのこと、「お互の心が内に燃えたではないか」（ルカ24章30—32）と証した事柄の先取りである。従つて彼らにも早、律法によつて不当に攻撃するパリサイ人や律法学者たちの毒々しい言葉を氣にとめない。主との食卓の交わりこそキリスト教的交わりの完成であつた。

今日、教会の証しの業が途方にくれた業であつても、礼拝と聖餐における主との交わりの真実は失われぬ。深い霧の中に入り込んだ状況が現われても、それを嘆く必要はない。われらはキリストの体と血との賜物を受け、その和解決の賜物において、赦しと新しい生命と、救いをいたゞくことに満足するからである。